

## 「東京語アクセントの聞き取りテスト」 21 言語グループの母語別・成績群別正答率

鮎澤孝子 (東京外国語大学)・小高京子 (国立国語研究所)

### 1. はじめに

われわれの研究グループでは、日本語の韻律教育のための基礎データ収集のため、「東京語アクセントの聞き取りテスト」(Nishinuma, 1994, 鮎澤, 1997)を実施してきている。東京語のアクセントの音響的特徴はアクセント核のある拍の次の拍に急なピッチの下がり目があることであり(杉藤, 1972)、アクセントの有無、位置がわかるということは、ピッチ下降の有無、ピッチの下がり目が聞き取れているということになる。東京語の音声環境で生まれ育った東京語話者は発話中のピッチ変動には無意識的に聞き慣れており、ピッチ下降についても意識してはいない。しかし、東京語と異なるアクセントでの発話は敏感に聞き分けることができ、また、「東京語アクセントの聞き取りテスト」を実施してみると、ほとんどの者が短時間の練習でピッチの下がり目が意識化でき、その位置をマークすることができる。

このピッチの下がり目を聞き取ることができ、自分の発話中でもピッチコントロールができるようにすることがアクセント教育であるが、まず、外国人日本語学習者にとってピッチの下がり目を聞き取ることがどのくらい難しいのか、どのようなアクセント型が聞き取りにくいのかなどを明らかにすることが必要である。

英語、ドイツ語、ロシア語などストレスアクセント言語の場合、ストレスアクセントのある音節が強く、長く、高く発話される。しかし、強さ、長さ、高さのどの要因が関わっているか、明確にはなっていない。中国語、タイ語のような声調言語では、それぞれの音節内でのピッチの変化やピッチのレベル差が音韻的な対立をなすが、やはりどの要因が聴覚的に重要であるのかは言語によって異なるようである(Gandour, 1983)。また、フランス語や韓国語のようにアクセントが音韻的な意味をもたない言語もある。東京語アクセントの聞き取りにおいては学習者の母語の影響があること、アクセントの習得状況によって同じ母語話者でも回答傾向に違いがあることなどが観察されている(鮎澤ほか, 1995, 1997c)が、異なる系統の言語を母語とする学習者間で似たような回答傾向があることも観察されている(西沼・ピーテルマン, 1997)。

なお、東京式アクセントの地域はかなり広く、共通語としての東京語も若い世代ではかなり習得されているようであるが、東京語アクセントの習得が難しいという日本人も多い。そこで無アクセント地域や京阪式アクセントの地域などの日本人学生も調査対象に加えている。

今回は日本各地の日本人大学生、東京周辺の大学に在学する外国人留学生、海外の日本語学習者から得られたテスト結果を、日本人は出身地域別、外国人学習者は母語別に分け、各グループを「東京語アクセントの聞き取りテスト」の正答率によって、上位群、下位群に2分し、成績群別に拍数・アクセント型別正答率として示した。日本人は6地域の計118名、外国人学習者は15言語グループの計667

名，総計 885 名の回答である。

## 2. 「東京語アクセントの聞き取りテスト」について

「東京語アクセントの聞き取りテスト」の詳細については 1996 年度 ESOP チーム研究成果報告書

『21 世紀の日本語教育に向けて』に記載されているので参照されたい。テスト項目のピッチ曲線も掲載されている。

このテープテストは 25 分弱のもので，3，4，5 拍語，計 72 項目からなる。回答用紙にはひらがなでテスト項目が書かれており，被験者はテープを聞きながら，ピッチの下がり目の有無を判定し，なければ「なし」に，あればピッチ下降の位置にマークをつける。テープの初めの 10 分はアクセントの説明や回答方法の練習で，テープを止めて学習者の母語で説明してもかまわない。

なお，回答の集計において，アクセント型を 1 型，2 型，3 型，4 型，0 型としているが，1 型は 1 拍目にアクセント核がある頭高型を表し，「めがね」「まつのき」「あきのかぜ」などが含まれる。

2，3，4 型は 2，3，4 拍目にアクセント核のある中高型で，「たまご」「ながさき」「ひらがな」「ろくじごる」などが含まれる。0 型は平板型，尾高型で，「からだ」「よこはま」「はしのした」などが含まれている。

テスト項目は 72 項目であるが，同じ語句が平叙文イントネーションと疑問文イントネーションで使われている場合や，単独発話または「私は」と言った」という文に挿入して提示されている場合があり，異なり項目数は 47 項目である。

## 3. 言語グループ別正答率

「東京語アクセントの聞き取りテスト」の正答率をテスト項目の拍数，アクセント型別に各言語グループの上位群・下位群ごとに集計し，図 1 から図 21 に示した。

各言語グループの被験者の人数，上位群・下位群の平均正答率，総合正答率を表 1 に示した。表，及び図の中の b は下位群，t は上位群を表す。

### 3.1. 図 1～3

図 1～3 は東京式アクセントの地域の大学生の回答である。上位群はほぼ 100% の正答率，下位群は 7 割の正答率である。5 拍 3 型の正答率が低くなっているが，これはテスト項目「あたままで」のピッチの下降が極めて緩やかで，聴覚的にピッチ下降を判定しにくいこと，また，「あたま」のアクセント型が尾高型・中高型の 2 型の間でゆれていることが原因であると推測できる。

### 3.2. 図 4～6

図 4～6 は東京式アクセント以外の地域の日本人学生の正答率である。京阪式アクセントの近畿地方，無アクセント地方の上位群は 85% の正答率で，東京式アクセント地域出身者の総合平均正答率と変わら

ない。那覇の上位群も7割以上の正答率である。

しかし、それぞれの地域の下位群は約5割から4割の正答率で、上位群とはかなり差がある。特に、頭高型のアクセントの正答率が低い。東京語の頭高型アクセントの場合、1拍目では句頭の上昇イントネーションがかかるために低く始まる(川上, 1956)。これが聞き取りにくさの原因と思われる。しかし、上位群では頭高型の正答率は高く、習得しやすいアクセント型のようなのである。

### 3.3. 図7～9

図7～9は東京周辺の大学の留学生の回答である。出身地により、北京語母語話者、台湾語母語話者、上海語母語話者と分けたが、台湾語母語話者、上海語母語話者は北京語話者でもある。そのためか3言語グループの正答率のパターンに共通した特徴が見られる。すなわち、上位群、下位群とも、0型つまり平板型アクセント、及び4拍3型、5拍4型の正答率が高い点である。4拍3型、5拍4型の場合、最終拍でピッチが下降する。北京語では語末に第4声の下降調が来ることが多く、最終拍でのピッチ下降は北京語話者には聞き取りやすいものと思われる。

上位群では、4拍2型、5拍3型の正答率が低いことも共通点であるが、これは最後の2拍でのピッチ下降を最後の1拍でのピッチ下降として回答する誤答が多いためである。最終拍での下降を好む聞きかたに加え、「あたま+まで」のように2拍の助詞があるとき、その助詞のアクセントを残す傾向があることなどが原因になっているようである(鮎澤ほか, 1997a,b)。

なお、下位群では頭高型が苦手であるが、上位群では正答率が高くなっており、個人差が大きく、北京語話者にとって習得しやすいアクセント型のようなのである。

### 3.4. 図10～12

図10～11は韓国の大学で日本語を専攻する大学1年～3年生の回答、図12はバンコクの大学で日本語を専攻する大学4年生の回答である。韓国語はアクセントは弁別的機能をもたない言語であるが、タイ語は声調言語である。

韓国語母語話者の正答率のパターンは図5の無アクセント地方の日本人の場合と似たパターンである。ソウル方言では平板型のピッチパターンが使われ、釜山方言では中高型のピッチパターンが使われているせいか、ソウル方言話者の場合は0型、つまり平板型の正答率が最も高いが、釜山方言話者の場合は頭高型、2型の中高型の正答率が高い(李ほか, 1997a,b)。

タイ語母語話者の場合、下位群の頭高型の正答率がかなりよく、上位群も下位群も0型の正答率ではあまり差がない。その他ではほぼ正答率の差は同じで、特に習得困難というアクセント型はないようである。

5拍3型の正答率が低い現象は、北京語話者、韓国語話者、タイ語話者に共通しており、日本人でも東京式アクセント地域以外の下位群で同じような傾向がある。5拍3型のテスト項目が「おとこ+の+こ」「あたま+まで」「あした+から」のような3拍名詞(尾高型)+助詞という構成になっていること

が影響していると推測できる。韓国語母語話者、中国語母語話者を対象とした別の聞き取りテストでは「やま+のぼり」「なつ+やすみ」のような複合語や「プログラム」が5拍3型のテスト項目として使われており、その場合の正答率はそれほど悪くはない。これについては別に報告する予定である。

### 3.5. 図 13~15

図 13~15 は香港、シンガポール、ドイツの大学生の回答である。これらのグループでは下位群では頭高型が苦手であるが、上位群では悪くはない。0型は下位群で最も正答率が高いが、上位群でも同様の正答率である。

香港の広東語話者の場合、上位群の学生が無声化した拍（例えば「はしのした」の2番目の「し」、「はたらく」の「く」）でピッチ下降があったように聞いて回答しているため、0型の正答率が低くなっている（鮎澤ほか,1997d）。なお、広東語では3段階のピッチレベル、2種の上昇調を音韻的に弁別しており（Vance,1989）、東京語アクセントもピッチレベルで聞き取っている可能性がある。北京語話者のように下降調に引きずられて、5拍4型が特によく、5拍3型が苦手ということはない。

シンガポールの学生は多くが福建語母語話者であるが、英語、北京語なども話す多言語話者である。彼らの回答には、北京語話者のような回答傾向は見られない。むしろ、ストレスアクセントのドイツ語話者と似たような回答傾向であり、彼らが英語話者であることが関係しているものと推測できる（林ほか,1997）。

### 3.6. 図 16~18

図 16~18 は、メキシコのスペイン語母語話者の高校生、ブラジルのポルトガル語母語話者の大学生、及びモスクワのロシア語母語話者の大学生（一部分は新潟のロシア語話者の留学生）の回答である。

それぞれの言語的背景は異なるが、東京語アクセントの聞き取りに共通点が見られる。すなわち、下位群では0型と4拍2型、5拍3型の正答率がよく、上位群では1型、2型、0型がよいが、4拍3型、5拍4型が苦手な点である。このような回答傾向から、この言語グループはピッチ下降の有無は聞き取れているが、ピッチ下降の代わりに、ピッチピークの位置を聞き取っているものと推測できる。ピッチピークを伴わない最終拍でのピッチ下降は聞き取れていない。頭高型は下位群では聞き取れていないが、上位群では正答率が高い。下位群は句頭の上昇がピークの聞き取りを邪魔しているものと思われる。

### 3.7. 図 19~21

図 19~21 のフランス語母語話者、イタリア語母語話者、マレー語母語話者の共通点は上位群、下位群間の正答率の差がわずかであること、アクセント型別正答率のパターンは図 16~18 の下位群によく似ていることである。つまり、このグループの場合もピッチ下降を聞き取っているのではなく、ピッチ下降の有無、ピッチピークの位置を聞き取っているようである。

上位群，下位群の差が小さいということは，それぞれのグループ内の個人差が小さいということである．総合平均点では，図9の上海語母語話者が45%，図19のフランス語母語話者が44%でほぼ同じだが，上海語話者の下位群の平均点が31%，上位群の平均が60%であるのに対し，フランス語話者は下位群35%，上位群52%である．上海語話者の上位群はフランス語話者の上位群に比べ，1型つまり頭高型の正答率が高いことに気がつく．上海語母語話者は東京及び東京周辺に在住しており，東京語音声に触れることで，頭高型の聞き取りが伸びたものと考えられる．フランス語話者の場合は直接に東京語音声に触れる機会がほとんどないために個人差も小さいものと推測できる．

ベネチア，マレーシアの学習者も東京語音声に触れる機会が少ないために全体的な正答率が低く，上位群・下位群の差も小さいものと思われる．

#### 4．まとめ

21言語グループの「東京語アクセントの聞き取りテスト」の結果を上位群・下位群別に調べた．各言語グループの人数や総合的な正答率の違い，学習時間や日本在住か海外在住かなどの差があり，グループ間での相違点を比較することは難しいが，東京語アクセントの聞き取りについていくつか興味深いことが観察できた．

1 日本人大学生の場合，東京式アクセント地域以外でも約半数は東京式アクセント地域と同じように東京語アクセントが聞き取れている．残り半数は頭高型アクセントの正答率が低くなっている．

2. 北京語話者の場合，最終拍でのピッチ下降の正答率が高いが，後ろから2拍目のピッチ下降も最終拍での下降として聞いてしまう．母語のピッチパターンの影響のようである．

3. 一般的に上位群では頭高型の正答率が高いが，下位群では低く，頭高型のピッチ下降が聞き取れるかどうか上位群・下位群の差に関わっている．上位群・下位群の正答率の差が小さいときには上位群の頭高型の正答率が低い．

4. ロマンズ語，ロシア語，マレー語母語話者の場合，ピッチの下がり目の有無、ピッチピークを聞き取っているようであるが，ピッチの下がり目を聞くことは苦手ようである．

今後，さらに「東京語アクセントの聞き取りテスト」の結果の整理を進めながら，以上のような結果を踏まえ，アクセント聞き取り練習のための教材を完成させていく予定である．

表1 母語・成績群別正答率

図番号	地域	母語	被験者	成績群	人数	正答率	総合正答率
図1	東京	東京方言	大学生	b	15名	74	86%
				t	15名	98	
図2	静岡愛知	静岡愛知方言	大学生	b	16名	71	84%
				t	15名	97	
図3	中国地方	中国地方方言	大学生	b	14名	69	84%
				t	16名	97	
図4	近畿地方	関西方言	大学生	b	29名	49	66%
				t	27名	85	
図5	茨城・福島他	無アクセント方言	大学生	b	15名	50	68%
				t	15名	85	
図6	那覇	那覇方言	大学生	b	21名	38	56%
				t	20名	74	
図7	中国北方(東京)	北京語	東京周辺大学留学生	b	15名	40	53%
				t	15名	66	
図8	台湾(東京)	台湾語	東京周辺大学留学生	b	20名	39	56%
				t	19名	75	
図9	上海(東京)	上海語	東京周辺大学留学生	b	13名	31	45%
				t	13名	60	
図10	ソウル	韓国語 ソウル方言	大学1～3年生	b	27名	41	53%
				t	27名	66	
図11	釜山	韓国語 釜山方言	大学1～3年生	b	24名	47	63%
				t	24名	77	
図12	バンコク	タイ語	大学4年生	b	19名	48	61%
				t	18名	74	
図13	香港	広東語	大学1・3年生	b	29名	47	63%
				t	27名	80	
図14	シンガポール	福建語・他	大学生 学習歴6カ月	b	28名	36	50%
				t	26名	64	
図15	ドイツ	ドイツ語	ドイツ諸大学 学生	b	24名	37	48%
				t	26名	59	
図16	メキシコ	スペイン語	高校生	b	22名	38	49%
				t	23名	61	
図17	ブラジル	ポルトガル語	大学生	b	20名	40	49%
				t	20名	60	
図18	ロシア	ロシア語	大学生	b	17名	39	52%
				t	19名	65	
図19	フランス	フランス語	大学生	b	34名	35	44%
				t	38名	52	
図20	ベネチア	イタリア語	大学生	b	22名	29	38%
				t	23名	45	
図21	マレーシア	マレーシア語	予備教育1年 未満	b	16名	31	38%
				T	19名	44	

図1 東京方言話者

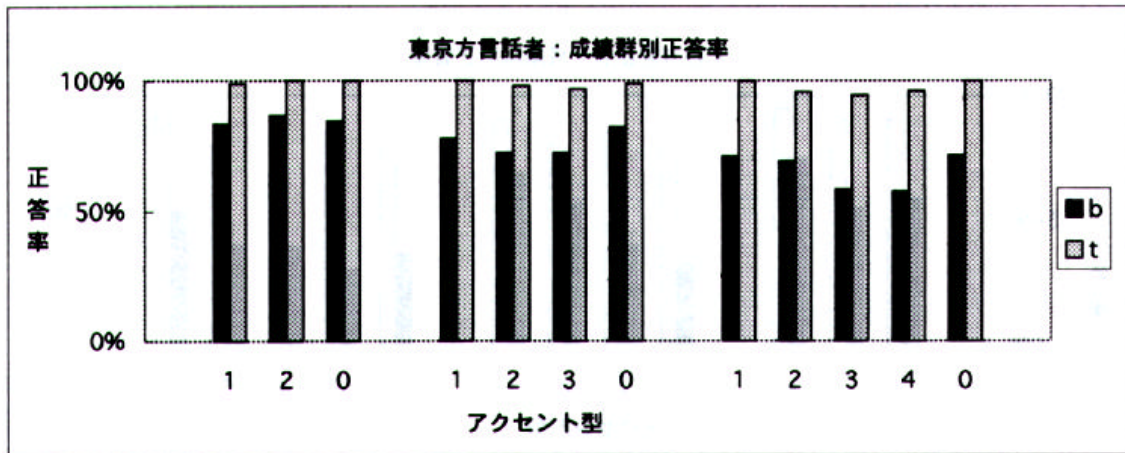


図2 静岡・愛知方言話者

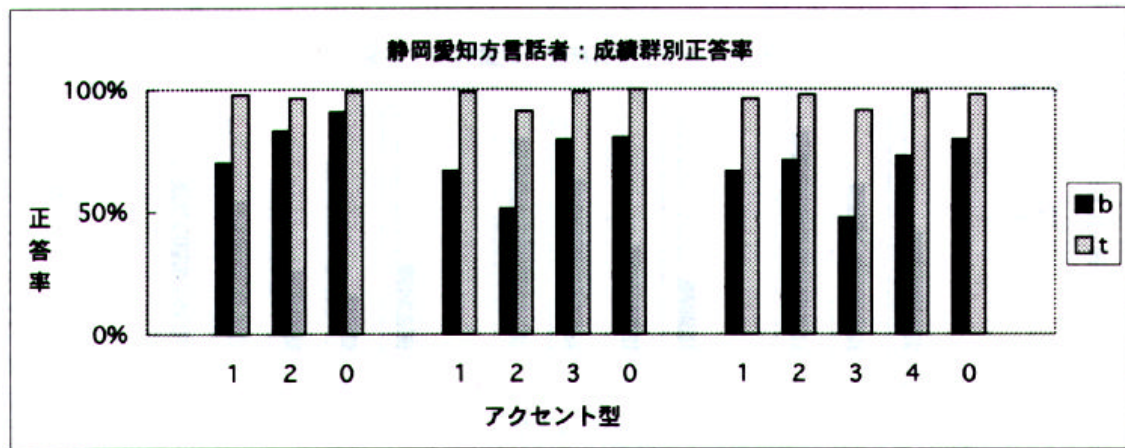


図3 中国地方方言話者

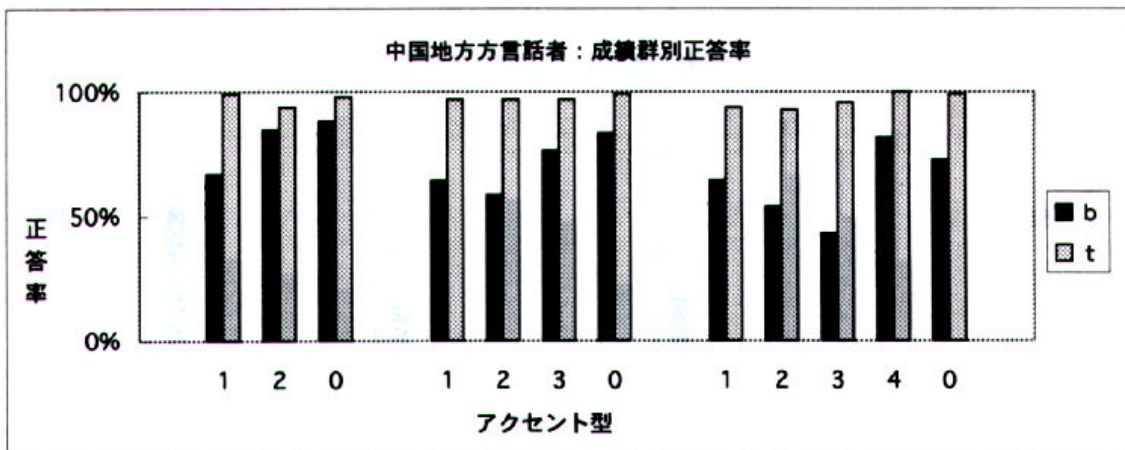




図4 関西方言話者

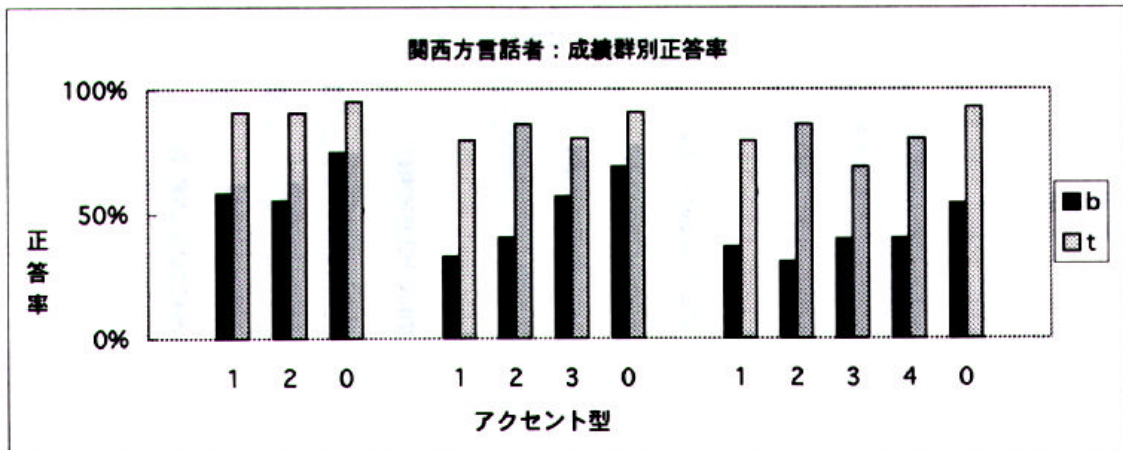


図5 無アクセント方言話者

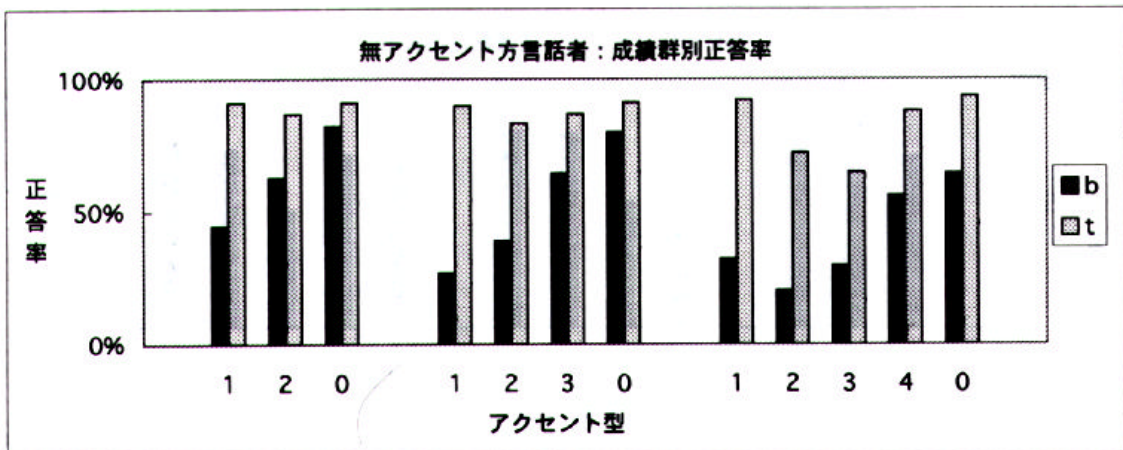


図6 那覇方言話者

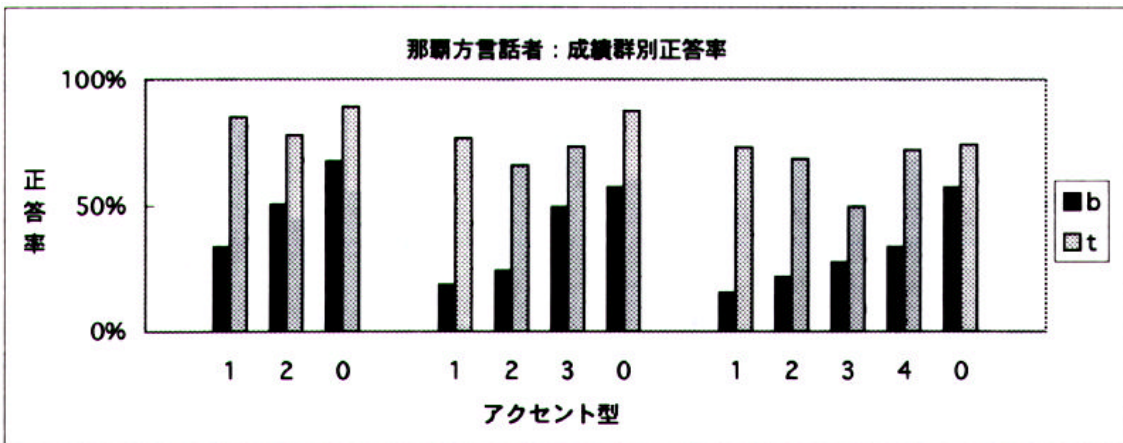




図7 北京語母語話者

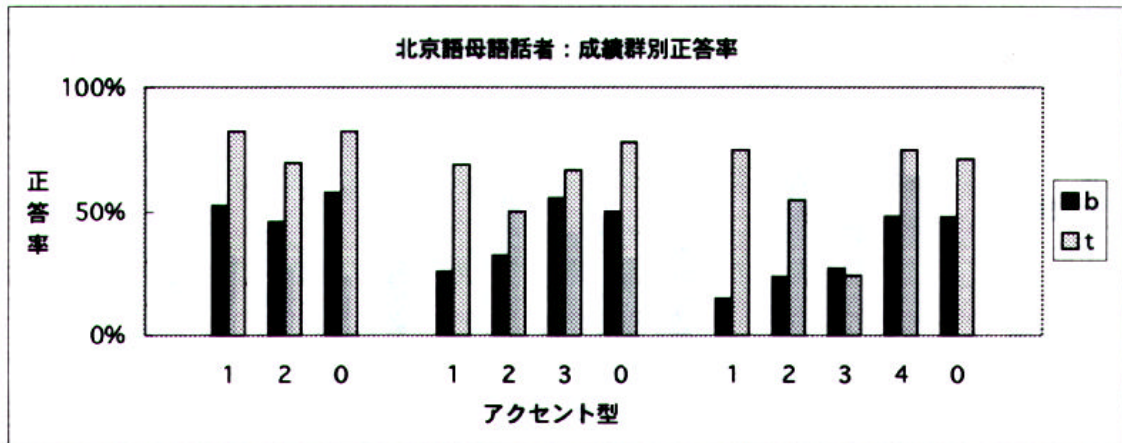


図8 台湾語母語話者

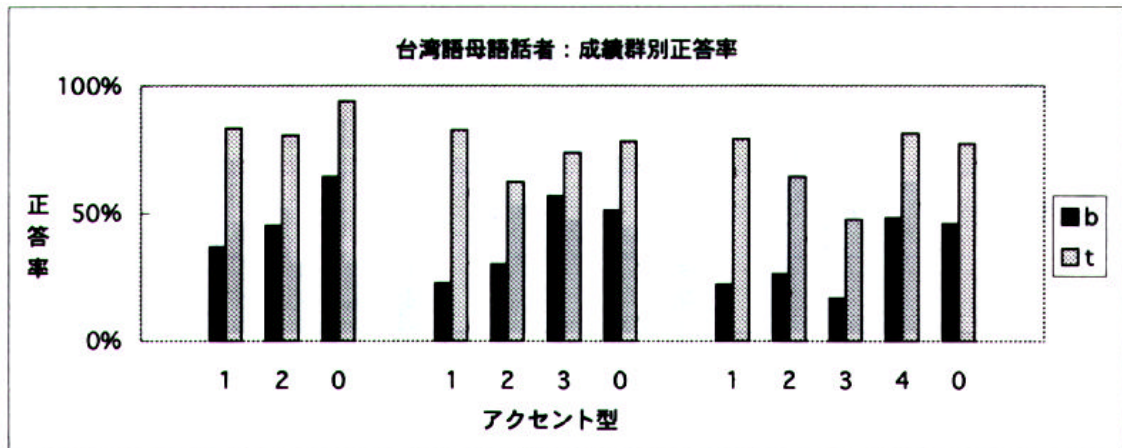


図9 上海語母語話者

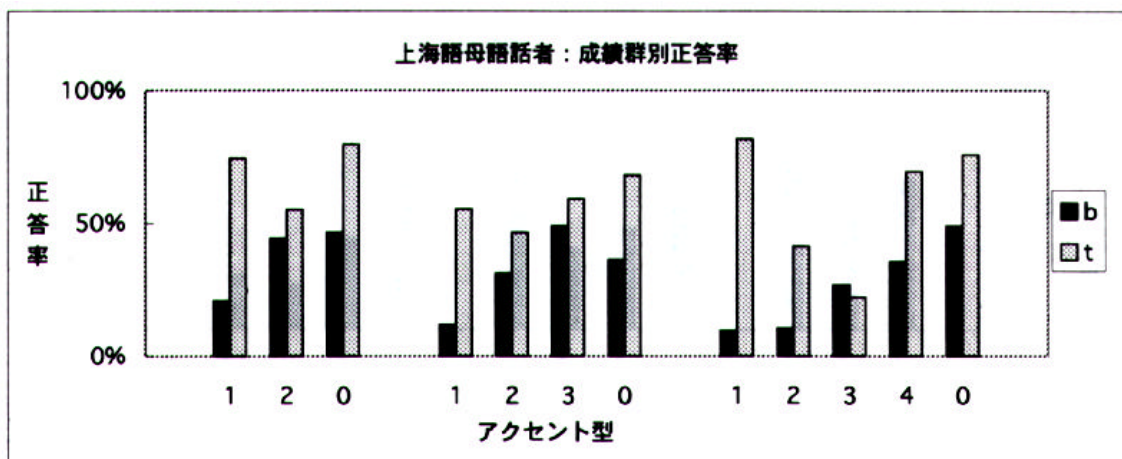


図10 ソウル方言話者

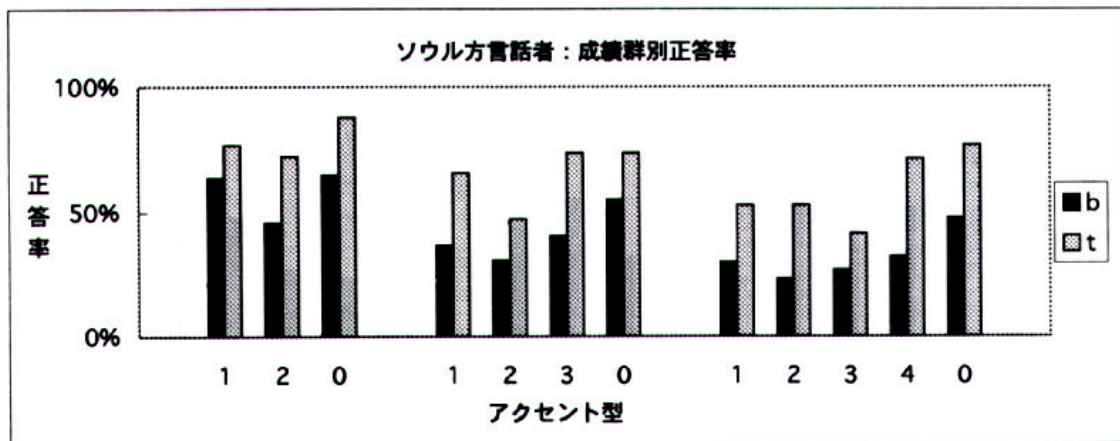


図11 釜山方言話者

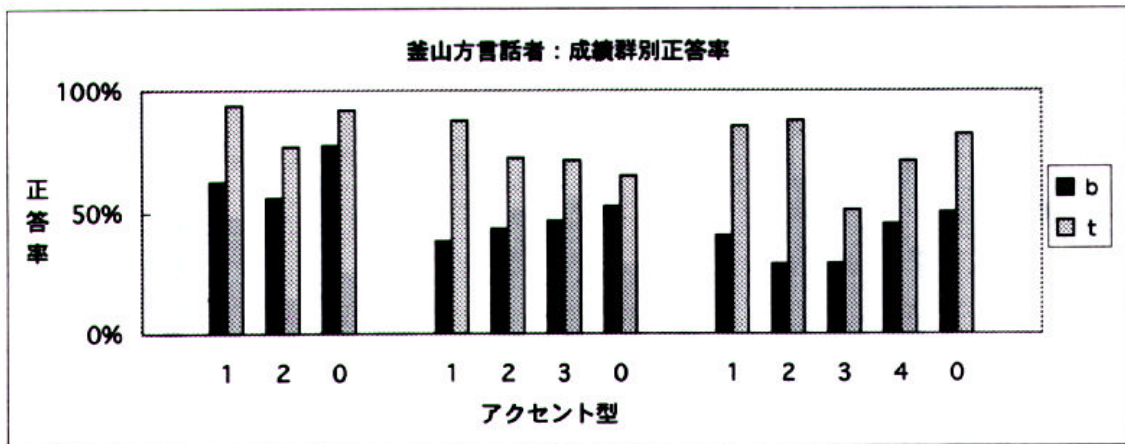


図12 タイ語母語話者

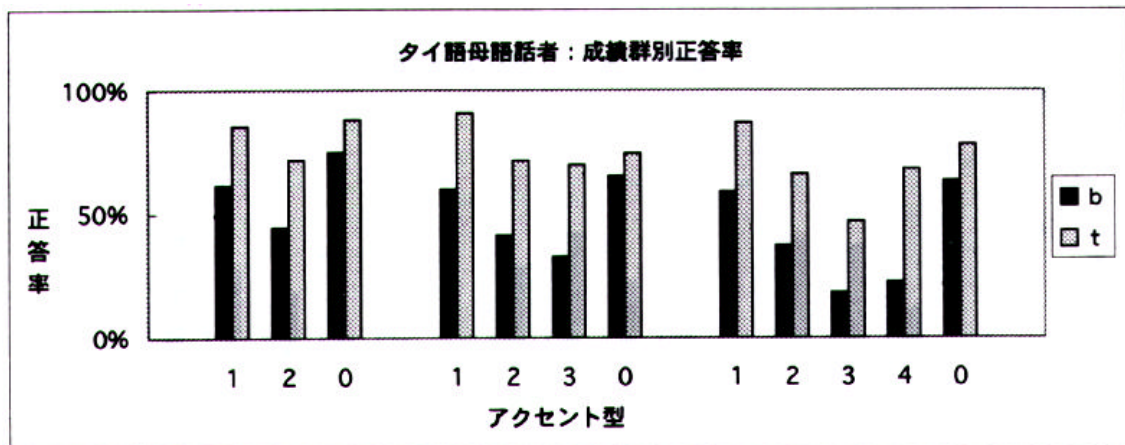


図13 広東語母語話者

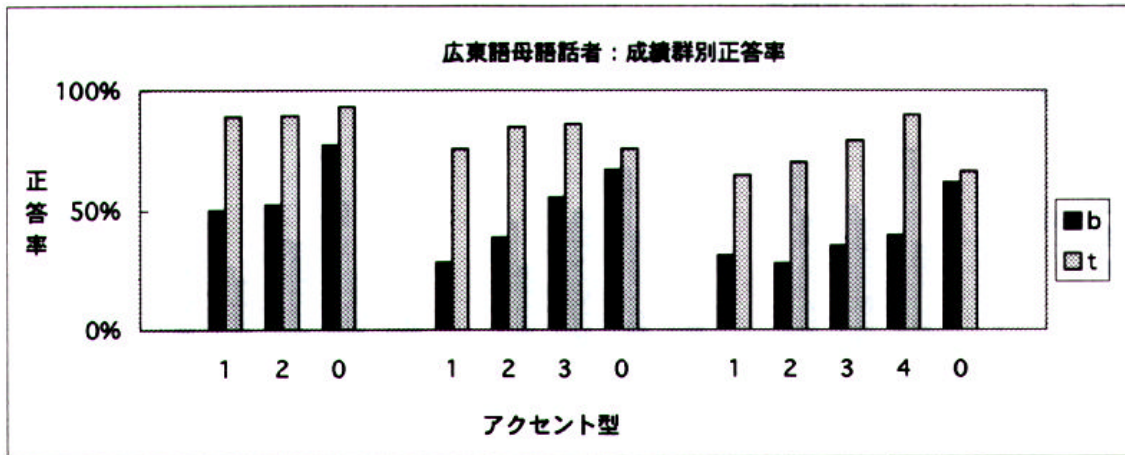


図14 福建語母語話者

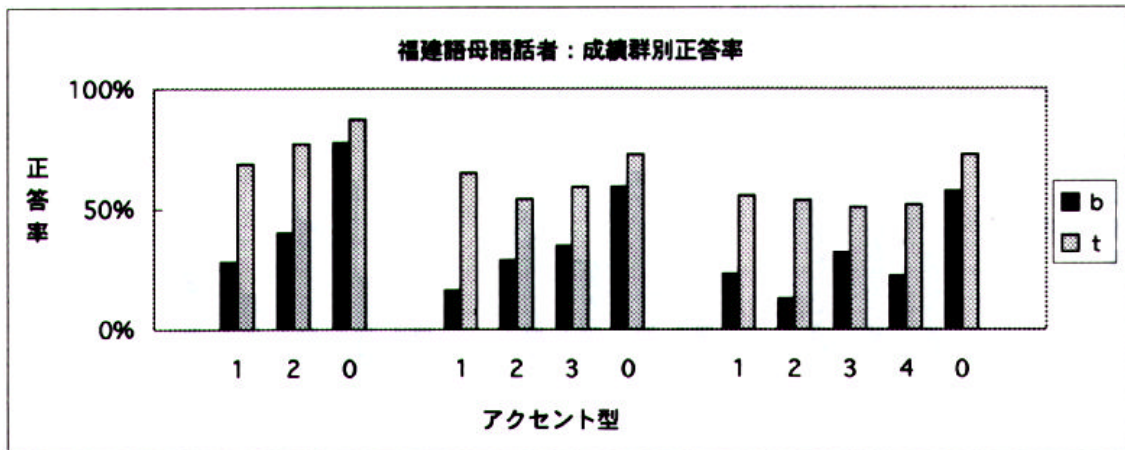


図15 ドイツ語母語話者

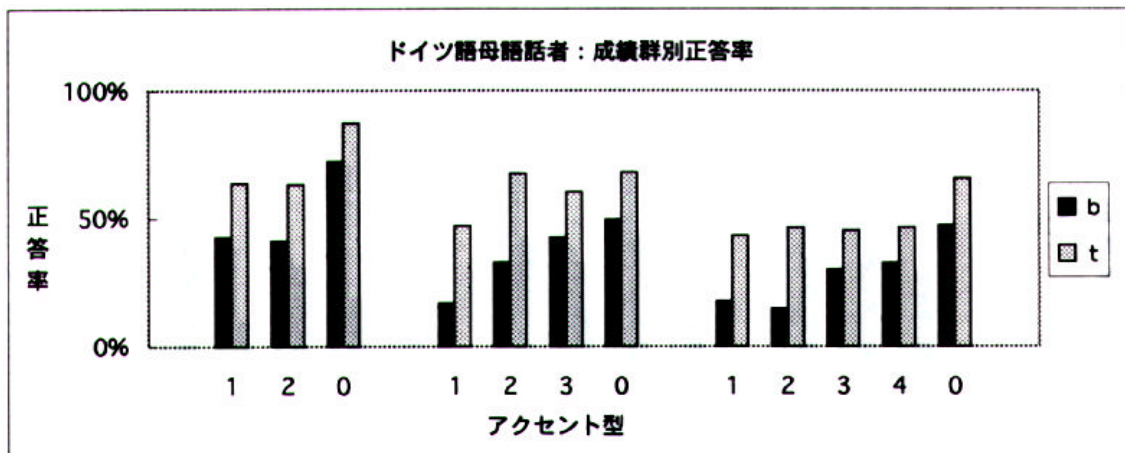




図16 スペイン語母語話者

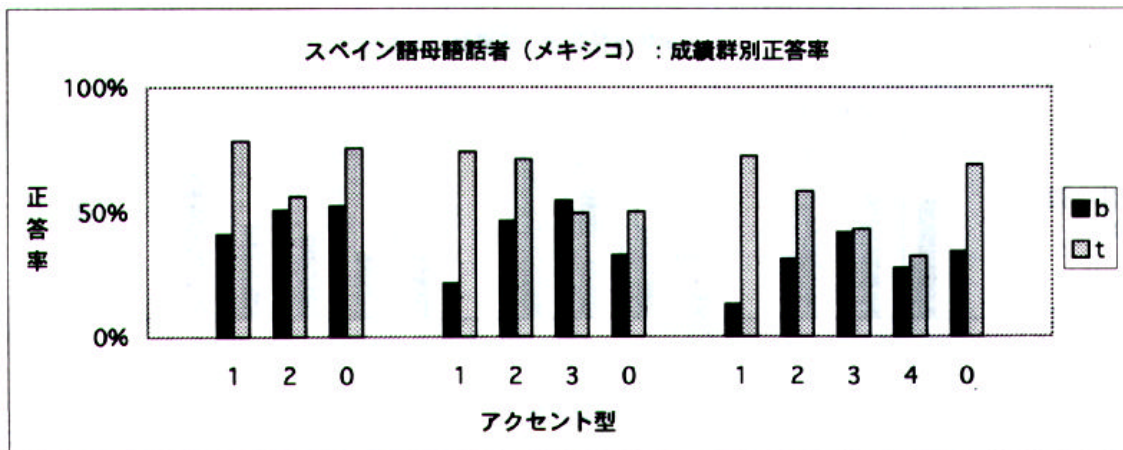


図17 ポルトガル語母語話者

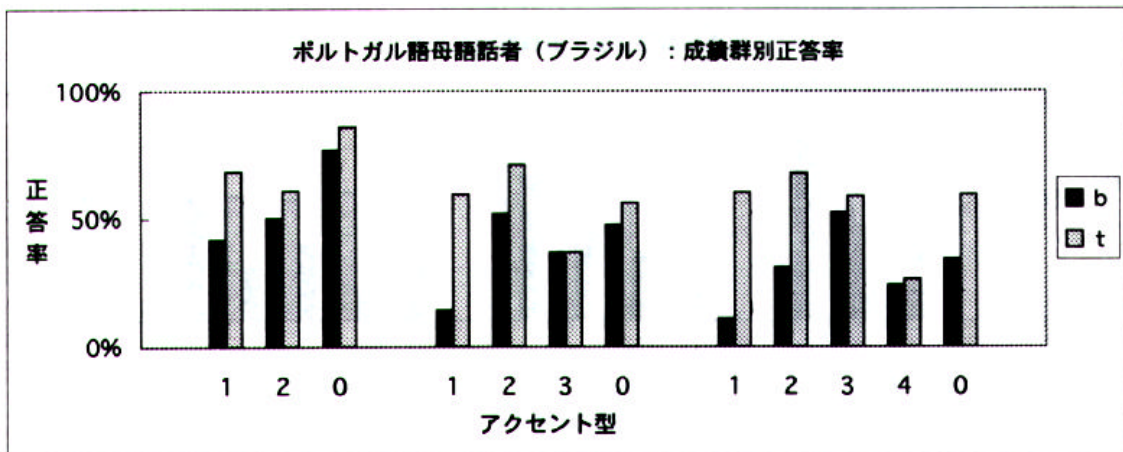


図18 ロシア語母語話者

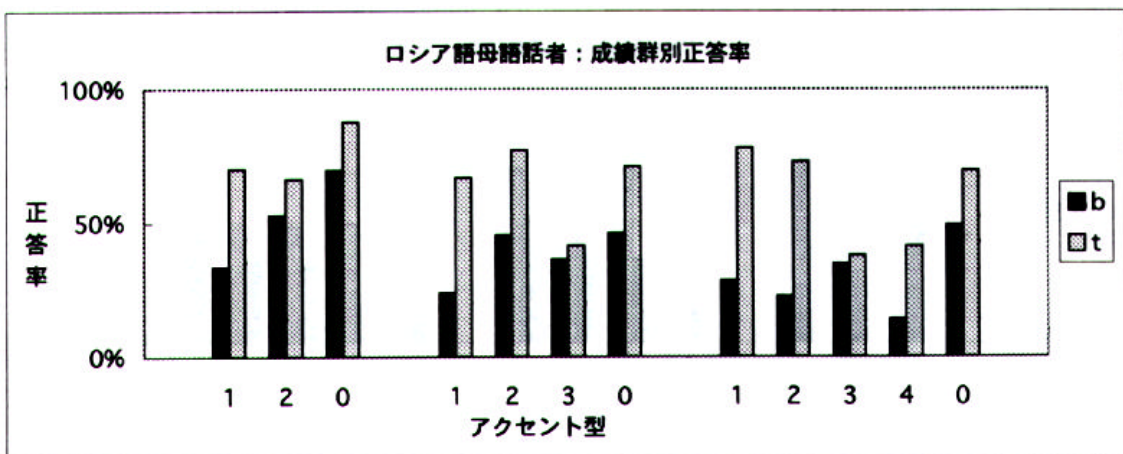


図19 フランス語母語話者

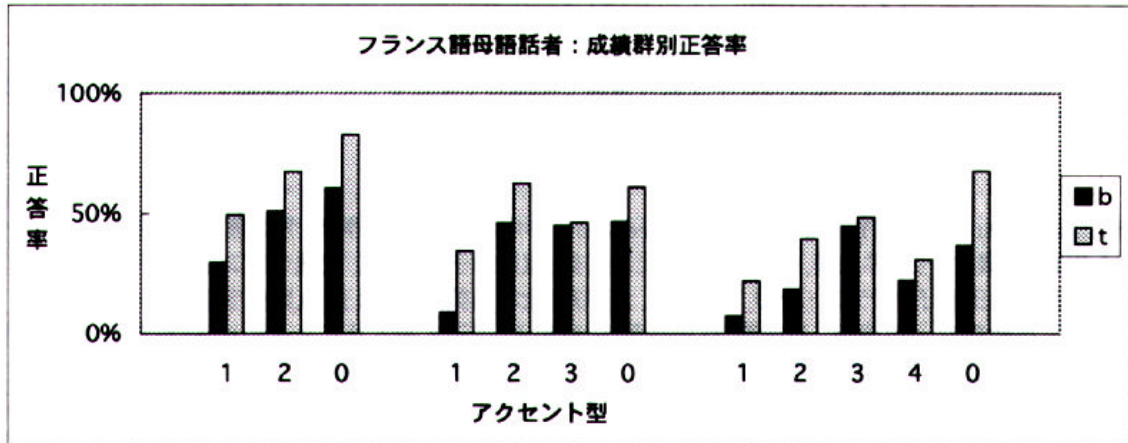


図20 イタリア語母語話者

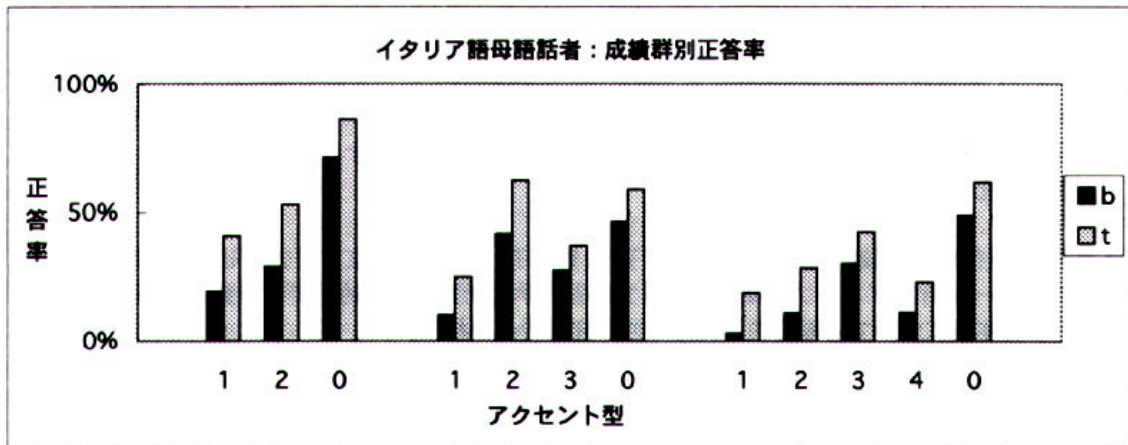
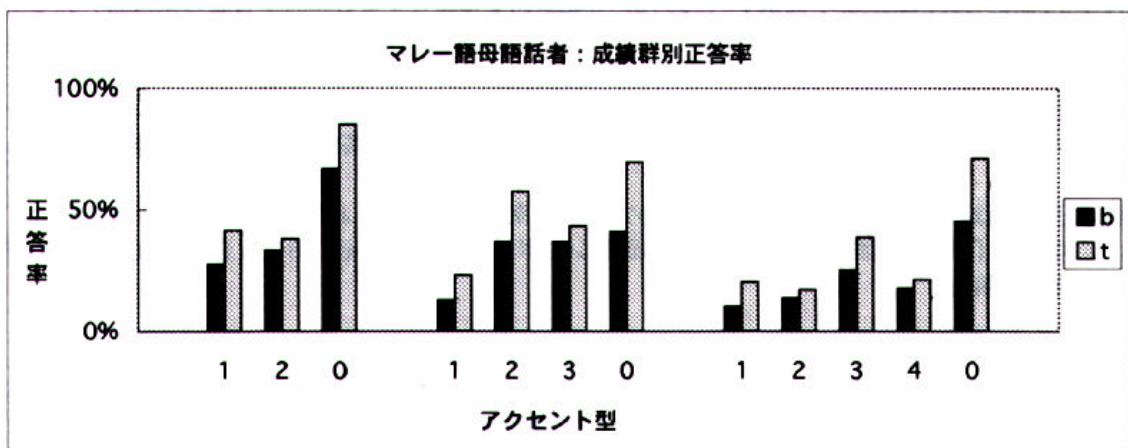


図21 マレー語母語話者



## 謝辞

今回の報告は、日本国内・海外の日本語教育機関で実施して下さった「東京語アクセントの聞き取りテスト」の結果をまとめたものです。テストを実施して下さった先生方に心から御礼申し上げます。先生方のお名前をここに記し、感謝の意を表します（敬称略）。

Doi, Elsa T., Ou Yang Yi Yun, Seah, David Chee-Meow, 赤木浩文, 阿南婦美代, 荒井雅子, 李明姫, 猪崎保子, 石田敏子, 磯村 - 弘, 井上優, 井内麻矢子, 上田初美, 植田栄子, 大木充, 大城ヴァントロイヤー朋子, 大曾美恵子, 金田智子, ガラン・クリスチャン, 河津基, 金城尚美, 工藤節子, 久野由宇子, ゲーリッシュ大島圭子, 小池ひで, 小山揚子, 高秀晚, 作田奈苗, 佐藤純子, 沢辺アルトリヒターゆり, 白石文子, 杉田優子, 千葉苑子, 土屋順 -, 土屋千尋, トリーティップ・タナパイサーン, 中川かず子, 中川千恵子, 西郡仁朗, 二通信子, 野呂幾久子, 林良子, 早崎由加里, 原ひろみ, 平田悦朗, 福岡昌子, 法貴則子, 前田マーガレット, 的場主真, 的場麻里, 丸山ひでお, 山田伸子, 山田人士, 山中 - 樹, 楊立明, 李活雄, 林虹枕, 故中川努, 故三浦 - 朗。

## 参考文献

鮎澤孝子(1997) 「 「東京語アクセントの聞き取りテスト」について」『21 世紀の日本語音声教育に向けて』新プロ「日本語」研究班 3「音声言語の韻律特徴に関する実験的研究」チーム平成 8 年度研究報告書, 177-204.

鮎澤孝子, 西沼行博, 李明姫, 荒井雅子, 小高京子, 法貴則子(1995) 「東京語アクセント聴取実験結果の分析 - 10 言語グループの結果 - 」 『文部省科学研究費（創成的基礎研究費）国際社会における日本語についての総合的研究第 2 回研究報告会予稿集』, 25-32.

鮎澤孝子, 楊立明, 磯村 - 弘, 小高京子(1997a) 「北京語母語話者による東京語アクセントの知覚」『21 世紀の日本語音声教育に向けて』新プロ「日本語」研究班 3「音声言語の韻律特徴に関する実験的研究」チーム平成 8 年度研究報告書, 13-21.

鮎澤孝子, 西沼行博, 楊立明, 小高京子(1997b) 「北京語を母語とする日本語学習者の東京語アクセントの知覚」『日本語教育論文集 - 小出詞子先生退職記念 - 』, 凡人社, 69-81.

鮎澤孝子, 西沼行博, 小高京子(1997c) 「世界の諸言語母語話者及び諸方言母語話者による東京語アクセントの聞き取り」『平成 9 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 日本語教育学会, 220.

鮎澤孝子, 李活雄, 西沼行博, 小高京子(1997d) 「広東語母語話者による東京語アクセントの聞き取り」『第 3 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム - 21 世紀における日本語教育・日本研究 - 予稿集』

李明姫, 鮎澤孝子, 金世連(1997a) 「韓国語母語話者の「東京語アクセント聞き取りテスト」の結果 - ソウル・釜山・光州方言話者の場合 - 」『21 世紀の日本語音声教育に向けて』新プロ「日本語」研究班 3「音声言語の韻律特徴に関する実験的研究」チーム平成 8 年度研究報告書, 23-30.

李明姫, 鮎澤孝子, 西沼行博(1997b) 「ソウル出身日本語学習者の東京語アクセントの知覚」『日本学報』第 38 輯, 韓国日本学会, 87-98.

- 川上 薫(1956) 「文頭のイントネーション」『国語学』25.
- 杉藤美代子(1992) 「 ” おそ下り ” 考 - 動態測定による日本語アクセントの研究 - 」『大阪樟蔭女子大学論集』10.(徳川宗賢編『論集日本語研究2 アクセント』(1980)有精堂,66-94.)
- 林良子, 鮎澤孝子, 西沼行博(1997) 「ドイツ語母語話者による「東京語アクセントの聞き取りテスト」の結果分析」『21世紀の日本語音声教育に向けて』新プロ「日本語」研究班3「音声言語の韻律特徴に関する実験的研究」チーム平成8年度研究報告書,31-36.
- 船津誠也, 井内麻矢子(1997a) 「ロシア語母語話者の日本語アクセントの知覚」『21世紀の日本語音声教育に向けて』新プロ「日本語」研究班3「音声言語の韻律特徴に関する実験的研究」チーム平成8年度研究報告書,37-60.
- 船津誠也, 井内麻矢子(1997b) 「ストレスアクセント言語を母語とする話者のピッチアクセントの知覚」『平成8年度日本音声学会全国大会予稿集』,日本音声学会,65-70.
- 西沼行博(1997) 「アメリカ人・フランス人日本語学習者のアクセント聞き取り - 母語干渉による知覚のゆがみ - 」『21世紀の日本語音声教育に向けて』新プロ「日本語」研究班3「音声言語の韻律特徴に関する実験的研究」チーム平成8年度研究報告書,5-12.
- 西沼行博, 鮎澤孝子, 阿南婦美代(1996) 「フランス人日本語学習者は東京語アクセントをどのように聞くか」,『論叢』第46号,長崎外国語短期大学,103-111.
- 西沼行博, ミッシェル・ピーテルマン(1997) 「外国人日本語学習者の東京語アクセントの知覚データの統計的概観」『平成9年度日本音声学会全国大会予稿集』,日本音声学会,59-64.
- Ayusawa, T. & Nishinuma, Y. (1997) "How do non-native speakers perceive Japanese pitch accent? Results from 10 language groups", *Travaux de l'Institut de Phonétique d'Aix*, vol.17, 185-199.
- Gandour, J.(1983) "Tone perception in Far Eastern languages", *Journal of Phonetics* 11,149-175.
- Nishinuma, Y. (1994) "How do the French perceive Tonal Accent in Japanese? Experimental evidence" *ICSLP94*, 646-649.
- Vance, T.(1977) "Tonal Distinctions in Cantonese", *Phonetica* 34,943-107.